間文化研究機構総合地球環境学研究所 ( 地球研 ) と緊密な連携関係を、地球研の設立以来維持しています。本年度は、当センターの理論生態学分野の山村則男教授が地球研に 6 月より移動し、地球研プロジェクト「生態系ネットワークの崩壊と再生」のリーダーとして今後研究を展開します。また現在地球研では、生態研より移動した教員によってすでに 2 つのプロジェクト (「日本列島における人間–自然相互関係の歴史的・文化的検討」リーダー湯本貴和教授、「病原生物と人間の相互作用環」リーダー川端善一郎教授 ) が進行しています。地球研との連携については、今後いっそう強力に推進していきたいと考えております。

本年度は、京都大学総合博物館において生態学研究センターの研究を中心とした「生態学が語る不思議な世界—生物の多様性って何だろう？—」を 8 月 1 日より半年間の企画展として行います。私どものミッションである「生物多様性および生態系機能の解明と保全理論」をわかりやすく展示し、様々な年齢層に広くアピールする展示を目指します。是非ご来場下さいますようお願い申し上げます。その展示内容にあわせたジュニアレクチャーシリーズ及び公開講座も予定しています。また同様のタイトルで京都大学出版会から学術選書も出版する予定です。

本年度は、京都大学の第一期中期目標・中期計画 ( 平成 16 年度〜平成 21 年度 ) の後半に突入する年です。生態学研究センターは、ミッションに基づいた新しい学問体系の構築と国際的に卓越し開かれた研究拠点の形成に向けた研究活動を展開するとともに、研究成果を広く社会に還元するという目標に向かって邁進致します。皆様のより一層のご協力とご支援を、当センターの構成員を代表してお願い申し上げます。

## センター長を終えるにあたって

大串隆之

2007 年 3 月 31 日をもって 2 年間のセンター長の職を全うしました。これも、副センター長の高林先生を始め、教職員の方々の多大なるご協力の賜物であり、この場を借りて厚くお礼申し上げます。2 年前に清水前センター長の後を引き継ぎましたが、京都大学では法人化後の概算要求や学内運営において新たなシステムが次々に導入され、それに伴うさまざまな課題に対応する二年間でした。また、学内・学外連携、附置研・センターの連携などで新たな取り組みを行ってきました。

まず、学内連携について。平成 19 年度概算要求では、生存圏研究所と共同で全国でも希に見る規模を誇る大型温室 ( DASH システム ) を提案しました。幸いにもこれが認められ、年明けの完成を目指して間もなく建物の工事に取り掛かる予定です ( 設置は宇治キャンパス )。これにより、空間スケールの大きな実験生態学の発展が期待されます。また、昨年 10 月には地球環境学堂に新しく設置されたベネッセコーポレーションの寄附講座「森川里海連環学分野」の立ち上げに伴い、フィールド科学教育研究センターおよび総合博物館とともに協働分野として参画することになりました。

総合地球環境学研究所との連携については、昨年 4 月にインキュベーションスタディーとして採択された「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生 ( プロジェクトリーダー 山村則男教授 )」が 10 月にはプレリサーチに進み、今年度からフルリサーチとして本格的な研究としてスタートしました。これを受けて、山村教授は総合地球環境学研究所に異動することになります。また、すでに地球研に異動された教員をセンターの客員教員として位置づけ、組織としての連携をより明確にしました。また、昨年 2 月には地球研の連携機関懇談会が開催され、今後の連携のあり方について協議しました。

一方、法人化により、大学の附置研・センターにとっては学内の概算要求等や教育に対する貢献などでさまざまな問題が生じ、これらの問題に対処するために京都大学附置研究所・センター長会議が定期的に月 2 回開催されるようになり、問題に対して迅速に対応する体制が確立されました。その成果の一つとして、昨年の 3 月には京都大学附置研究所・センター主催のシンポジウム「京都からの提言」を東京で開催しました。それに引き続き、今年 3 月には第 2 回のシンポジウムを大阪で開催し、いずれも大きな成功を収めました。このシンポジウムは、日本各地を巡り今後 10 年間続けることにしています。また、附置研究所・センターの広報のために、時計台会館の入口を入った左手に大型プラズマディスプレイを設置し、研究所・センターの紹介を行っています。一方、昨年から、全国共同利用システムの抜本的な変更が検討されており、次の中期計画期間には何らかの大きな変更が行われる可能性があります。

センターのプロジェクトでは、2001 年から理学研究生物科学専攻および霊長類研究所と共同で担ってきた 21 世紀 COE 事業「生物多様性研究の統合のための拠点形成」が昨年度で終了しました。これを受けて、生物多様性の研究と若手研究者の養成のために、同じ体制で新たにグローバル COE 事業「生物の多様性と進化研究のための拠点形成」を申請しています。また、広報活動として、今年 8 月から 12 月まで、総合博物館においてセ

ンターの日ごろの活動を多くの方に知っていただくために、企画展「生態学が語る不思議な世界 ―生物の多様性って何だろう？―」を開催することになりました。さらに、センターの図書室に新たに「生態研ライブラリー」のコーナーを設け、これまでの成果のまとめとして、生態研のメンバーが出版した書籍を一覧できるようにしました。昨年 7 月には、大阪府立北野高校の一年生が総合学習の一環としてセンターを見学訪問し、高校生向けの講演を聴いた後、ミツバチの観察を行いました。また、2 年前から、大学院受験希望者のために秋にオープンキャンパスを行っており、好評を博しています。

第 1 期中期計画期間も中間点を過ぎ、来年度は早くも中期計画の評価が始まろうとしています。これまでの実績に基づいて、第 2 期の中期計画を作成する時期になりました。このため、今年の秋からその準備に取り掛からねばなりません。昨年行った自己点検評価に加えて、今年度は外部評価を行う予定です。これまでのセンターの活動の成果が厳しく問われます。2004 年に制定された国立大学法人京都大学の規定には、「生態学研究センターは、生態学に関する研究をおこなうとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供することを目的とする」と明記されています。生態学研究センターにはこの目的に即した、いやそれ以上の研究活動と成果が期待されています。これまでの研究成果を振り返り、問題点を明らかにすることにより、生物多様性科学の基盤を新たに方向づける「日本から世界へ」という独創的な研究の推進が欠かせません。今後も「生物多様性科学」の更なる発展のために、国際的に優れた研究成果の輩出を通して最大限の努力を続けていきます。

法人化後は、大学運営に関するさまざまな変革について、部局としての迅速な対応が常に求められています。種々の変革は大学という組織を活性化するための大事な処方箋ですが、一方では「社会の要請」というコトバに対して過剰反応しすぎないことも大切です。センターのミッションである新たな学問分野を切り開くためには、揺るぎない信念と確固とした長期的な展望を持って取り組まねばなりません。モラルとインテリジェンスが著しく低下しつつある社会の「要請」の意味を履き違えないように、今こそ「大学にしかできないことは何か」という根本課題に真剣に向きあう時ではないでしょうか。今後ともセンターの活動に対するご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、退任の挨拶に代えさせていただきます。

# 2007（平成 19）年度センター活動予定

生態学研究センターにおける 2007 年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ（http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp）で公開しています。

## 1．共同研究

2002 年度から始まった 21 世紀 COE プログラム「生物多様性研究の統合のための拠点形成」（研究代表者：佐藤矩行）（文部科学省研究拠点形成費補助金）や、2001 年 12 月から継続している「植物の害虫に対する誘導防衛の制御機構」（研究代表者：高林純示）（科学技術振興事業団・戦略的基礎研究推進事業［CREST］）、2003 年 10 月からスタートした「各種安定同位体比に基づく流域生態系の健全性／持続可能性指標の構築（研究代表者：永田　俊）（科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業［CREST］）などの大型共同研究が進められている。

## 2．協力研究員

引き続き、協力研究員（Guest Scientist）を公募する。

## 3．公募型共同利用事業

2007 年度公募型共同利用事業として、分野間の交流や若手研究者の育成の観点から、以下の 4 件の研究会、3 件の野外実習が採択された。開催の日程などの詳細は、センターホームページに掲載する。

〈研究会〉

1) 代表者 : 武生雅明 ( 東京農業大学森林総合科学科 : 講師 )
『熱帯林における大型哺乳動物保護区の適地選定評価手順に関する研究会』
開催予定日 : 2007 年 6 月 30 日～ 7 月 1 日
開催予定地 : 東京農業大学

2) 代表者 : 伴　修平 ( 滋賀県立大学環境科学部環境生態